

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ギリシャのジュブナイル歴史小説：ロティ・ペトロヴィッツ＝ア ンドルツォプルの場合
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア, 30 : 60 - 68
Issue Date	2024-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055886">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055886</a>
Right	Copyright (c) 2024 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



## ギリシャのジュブナイル歴史小説

—— ロティ・ペトロヴィッツ＝アンドルツォプルの場合 ——

橘 孝司

國立臺中科技大學應用日語系 助理教授

### 0. はじめに

筆者は2018年6月から隔月でエッセイ「ギリシャ・ミステリへの招待」をウェブマガジン『翻訳ミステリー大賞シンジケート』に掲載している。その中で、残念ながら日本にあまり紹介されない、ギリシャのエンタメ小説についての情報を提供している。ミステリ小説（時に幻想・ホラー・SF作品も）が主だが、場合によっては純文学の小説にも触れている。

[https://honyakumystery.jp/category/book\\_guide/book\\_guide20](https://honyakumystery.jp/category/book_guide/book_guide20)

その流れで、ギリシャのジュブナイル文学も紹介できればと考えている。筆者の知る限り、この分野で和訳された作品もまた非常に少ない。真っ先に思い浮かぶのはアルキ・ゼイ（Αλκη Ζέη, 1923-2020）の以下の作品である。

アルキ・ゼイ『ヤマネコは見ていた』（*Wildcat Under Glass, Το Καπλάνι της Βιτρίνας*, 1963）、掛川恭子訳、1970年、岩波少年少女の本13

四年前に亡くなったゼイ女史はギリシャ文学界の重鎮であり、『アヒレアスの婚約者』（*Η αρραβωνιαστικιά του Αχιλλέα*, 1987）などの大人向きの作品も書いているが、よく知られているのはデビュー作『ヤマネコは見ていた』や『ペトロスの大冒険』（*Ο μεγάλος περίπατος του Πέτρου*, 1971）などのジュブナイル作で

ある。ことに『ヤマネコは見ていた』はギリシャ人読者に広く愛され、近年はグラフィックノベルも出版されている (Μεταίχιμο, 2021)。

もう一人、『ヤマネコは見ていた』と並んで、ジュブナイル作品が和訳されているのがロティ・ペトロヴィッツ (表記は「ロティ・ペトロビッツ」) である。彼女の作品については、「ギリシャ・ミステリへの招待」で二回にわたって紹介しておいた (以下のページを参照していただきたい)。

第 36 回「王の木陰の作家たち」<https://honyakumystery.jp/24749>

第 37 回「ギリシャのジュブナイル歴史小説」<https://honyakumystery.jp/25037>

本稿はこのエッセイの内容と重なるが、作家ペトロヴィッツとその作品の魅力について、簡単ながらもう一度紹介してみたい。

## 1. 作家の略歴

まずは作家について少しまとめておく。

ロティ・ペトロヴィッツ＝アンドルツォプル (Λότη Πέτροβιτς-Ανδρουτσοπούλου) は 1937 年アテネに生まれた。父親は北部マケドニア地方のセレス出身である。英文学を専攻し、27 年間移民難民援助の国際組織に勤務し、そのかわら主にジュブナイル文学作品の執筆と研究を続けている。著書はデビュー作『弟たちよ』ほか 50 冊以上にも及び、翻訳書もロアルド・ダール『おぼけ桃が行く』など 4 冊ある。作品執筆以外に絵画やコラージュも得意とし、自著 6 作の表紙絵・挿絵も作成している (例えば、『十二の月の物語』シリーズ (Ιστορίες με τους 12 μήνες, 1988) では幻想的で優しさ溢れる作品を見ることができる<sup>1)</sup>)。

受賞歴も数多く、アテネ学士院ウラニス財団児童文学賞 (1984 年)、国家児童文学賞 (1999 年) など 9 つもの文学賞を受賞している。1978 年から 3 年間国際児童図書評議会 (IBBY) ギリシャ支部事務局、さらに 2000 年から 8 年間その代表を務めた。

現在、ゼイ女史を継ぐギリシャ・ジュブナイル小説の代表的作家と言える。

## 2. 翻訳作品

これまでのところ、ペトロヴィッツの作品は、以下の二作が和訳されている。

①『弟たちよ —— 戦火の中のギリシャで ——』

*Ο μικρός αδελφός, The Little Brother*, 1976, Πατάκης, 32刷。岡本浜江訳、佑学社、1988年。

作家のデビュー作であり、ギリシャ「女性文学チーム賞」(Βραβείο της Γυναικείας Λογοτεχνικής Συντροφιάς (Γ.Λ.Σ.), 英語名 WOMENS LITERARY TEAM (W.L.T)) を授賞している。

②『ぼくたち五人家族』 *Σπίτι για πέντε, A Home for Five*, 1987, Πατάκης, 32刷。岡本浜江訳、佑学社、1990年。

第五長編。1989年伊パドヴァ大学「ピエール・パオロ・ヴァンジェリオ全欧州児童文学賞」を授賞した。

### 3. 作品の特徴と魅力

この二作に見られるペトロヴィッツ作品の特徴とその魅力を簡単に見ておきたい。

読みながら筆者が特に感じた点をまとめると、「歴史・社会背景の描出」「語りの妙味」「未来への希望」「人間喜劇」の四点になると思う。以下それぞれについて述べていく。

#### 3.1. 歴史・社会背景の描出

ペトロヴィッツは幼児向けのおとぎ話(παράμυθια)も書いているのだが(例えば上記の『十二の月の物語』)、和訳された二作は小学校高学年以上を対象にしており、大人が読んでも楽しめる長編小説である。それは子供を主人公としながらも、その背後に現代ギリシャの歴史や社会の状況が盛り込まれ、読者にさまざまな問題を突き付けて来るからである。

この点を説明するために、二作品のあらすじをかいつまんで述べよう。

『弟たちよ』は第一次大戦のマケドニア地方の町セレスが舞台である。1914年にブルガリア軍が侵攻し、住民は退避を始めるが、パヴロス(16歳)と弟アレクサンドロス(12歳)は逃げ遅れてしまう。パヴロスは捕えられ、ブルガリアへ強制労働に送られる。パヴロスが過酷な試練に耐え、家族と再会できるのかどうかストーリーの主軸となる。しかし、それだけにとどまらず、主人公やその父親の口を通して、激動する当時の歴史的背景が随所で説明されていく。

1913年ブルガリア相手の第二次バルカン戦争は終結したが、その翌年独逸同盟国と英仏協商国の間で第一次大戦が勃発する。ギリシャは当初中立だったが、

同盟国側のブルガリアはバルカン戦争での敗戦の復讐に燃え、マケドニア地方に侵攻して来る。協商国軍もテサロニキに上陸し陣営を張る。そんな中で、ギリシャ国内も国の行先を巡って世論が真っ二つに分かれてしまう。やがて、親独派コンスタンディノス王が亡命し、時のヴェニゼロス政府は協商側に加わり、戦争に巻き込まれていく。

そういう動きの中を、自由を求めてパヴロスとアレクサンドロス兄弟が駆け巡るのである。パヴロスは敵軍に捕えられ、アレクサンドロスはレジスタンスに身を捧げる。

兄弟のスリルに富む冒険譚の背後に、厳然たる歴史の流れが置かれることで、リーダビリティに富むジュブナイル歴史小説が生まれている。

なお、主人公パヴロスのモデルは作家の父親で、同じような苦難の経験をしたらしい。冒頭に献辞として以下のことばがある。

「この本を、わたくしの父ナタリデス・ペトロビッツにささげます。父は第一次大戦中、十七歳で敵の人質となり、この本の主人公と同じ体験をしました」

『ぼくたち五人家族』は打って変わって、1980年代のアテネに住む家族の話である。家族四人は少々複雑な関係にある。ともに離婚を経験したオレステスとアンナが出会い再婚するが、それぞれに連れ子（フィリポス 13歳とアレス 9歳）がいる。微妙な年齢の子供たちは何かと張り合い、両親は相手の親子を傷つけないように遠慮し合いながらぎこちない生活を送っている。いくつかの小さな事件が起きて人間関係が揺さぶられていくが、はたして信頼し合う家庭にたどり着けるのか、読者は最後まで見守り続けることになる。

この作品には発表当時の1980年代のギリシャ都市の家族、親子、夫婦関係の困難さの縮図が浮かび上がる。現実には1980年には十年前に比べて離婚件数が倍に増えているのだが<sup>2</sup>、その家族の形の激変する時代に子供たちがどう感じていたのか、不安な感情の揺れが描かれている。

フィリポスは自問する。「ぼくはいま『新しい弟』っていった。けど、ほんとうにそう呼ぶべきなのかどうか、ぼくにはまだよくわからない。だいたいお父さんがちがって、お母さんもちがっている男の子のことを弟っていえるのだろうか」(p. 9)

また、結末近くで、夫婦別姓の法律が制定されたことが言及される。

「新しい法律ではお母さんも結婚したあと名字を変えなくてもいいそうです」(p. 114)、「新しい法律で、子供は親がいいと思う名字を自由に選んで付けられる」(p. 156)

ギリシャでは1983年の法改正により、女性は結婚後も姓を保持することが可能になった。また、子供の姓は両親の協議によるとされた<sup>3</sup>。

そこで、母アンナは夫の姓「コンスタンティニディス」の名乗りをやめ、結婚前の「パパダキス」姓に戻る。また、子供たちはそれぞれ、実父の姓、実母の姓を選ぶが、お互いの感情をどう左右するのかが物語の最後に描かれる（これについては以下でも触れる）。

このように、『ぼくたち五人家族』は同時代の家族形態の変遷や夫婦別姓の新法といった社会の動きを取り込み、それが登場人物にどのような影響を与えるのかを細やかに描いているのである。

### 3.2. 語りの妙味

『弟たちよ』は三人称語りであり、焦点はほぼ主役のパヴロスにあるが、『ぼくたち五人家族』は面白い語りの仕方を採用している。

フィリポスはプレゼントのカセットレコーダーを日記代わりにして、日々の話題を吹き込んでいく（「ぼくはきょうから『しゃべる日記』をつけることにした」(p. 6)）。ところが、何ごとも兄に対抗したがるやんちゃな弟アレスも自身のカセットレコーダーに録音を始めるのである（「ぼくはアレスです。今フィフィに話しています。フィフィはパパがきょうのお昼に持ってきてくれたテープレコーダーです」(p. 35)）。

こうして、二つの「一人称語り」が組み合わさる。この場合の聞き手は、通常「一人称語り」の小説にあるような漠然とした読者一般ではなく、少年たちが親友のように感じているカセットレコーダーであり、そうである以上、内容の正直さが保証されている。

と同時に、それが二つ組み合わされることで、同一の現実を異なる視点で眺めるポリフォニーが生まれるのである。

フィリポスが「アレスは怪獣だ」(p. 9)、「あの、あまったれ」(p. 12)とアレスを詰るかと思うと、アレスの方は「フィリポスはやたらぼくを怒る。でもクリスチナと会うとニコニコし始めるんだよ」(p. 38)などと足元をすくう。

これに加えて、両親の声も加わってくる。母アンナはクレタ在住の姉への手紙の中で、父オレステスは親友への電話で、それぞれの思いを「一人称」で語

る。両親が特に憂慮するのは二人の子供の関係である。遠慮からどうしても相手の子供より、自身の子供に対して厳しくなりがちである。母アンナは「いじめないでね。あの子（アレス）には愛情が必要なのよ」（p. 18）とフィリポスを諭せば、父オレステスは「フィリポスになまいきな口をきくな！」（p. 113）とアレスを叱るという具合で、相手の親子を立てようとして感情がすれ違い、痛々しいほどに切なさを生み出している。

このように、複数の語り手の組み合わせによって、同一の現実を捉える各人の微妙なずれが炙り出され、小さな家族の話ながら、家庭のスペクタクルの観を呈している。

### 3.3. 未来への希望

二作には戦争や家族間の感情のすれ違いという厳しい現実が描かれてはいるが、年少者に向けたジュブナイル作品ということもあり、作者の抱く未来への希望が明確に込められている。その眼差しはあくまで前向きで理想を目指している。

『弟たちよ』では、年少者へのいたわりの思いが繰り返し現れる。戦火の中、強制収容所にあっても、フィリポスは「弟と（急病で避難できない）従弟とどこが違う？」（p. 30、36）、「弟も町の仲間も同じことなのだ」（p. 50）との強い気持ちはなくすことはない。その思いは同じギリシャ人だけではなく、セルビア人やブルガリア人にも向けられる。結末でブルガリア人の幼子を救う姿には、作者のメッセージが凝縮されている。

『ぼくたち五人家族』の舞台は安定した社会ではあるが、子供にとって（大人にとっても）気軽に、信頼できる人間関係が築ける場所ではない。むしろ遠慮しあうことで、かえって近寄れない距離を生み出してしまう。しかしながら、日々の生活で絶えず波のように打ち寄せる小さな難題を乗り越えることで、少しずつ信頼関係が生まれてくる<sup>4</sup>。

最後の場面で夫妻に子供が生まれるので、ようやく題名通り五人家族になるが、三人はそれぞれ異なる姓を持つことになる。これについて、フィリポスはカセットに打ち明ける。「ぼくらは三つのちがう名字を持った兄弟妹ってことになるんだ」（p. 156）、「名字が同じだからって、それだけで、兄弟にはなれないさ」（p. 157）。外形ではなく、内なる関係こそ大事だ、というその言葉には力強い希望が込められている。

母アンナが手紙に書く希望溢れる文句もまた印象的である。「この大都会アテネは、おそろしいコンクリートジャングルかと思っていたけれど、さすがのコンクリートもあたたかい人の気持ちだけはつぶせないのですね」(p. 137)。

### 3.4. ペトロヴィッツ版《人間喜劇》

四つ目の特徴はペトロヴィッツの他作品を読んでいて気づいたことである。

作家は同一人物を異なる作品に登場させている。例えば、『間違いです、ノイガー先生！』(*Λάθος, κύριε Νόιγκερ!* 1989)には若き考古学者アレクシス・ノイガー(父親がドイツ人、母親はギリシャ人)が登場するが、この人物からドイツ語を教わるのは、『ぼくたち五人家族』の主演フィリポスなのだ。

あるいは、『兄弟たちよ』のパヴロスは『三人のための歌』(*Τραγούδι για τρεις*, 1992)で登場人物エリサヴェトの父親として四十代の姿で再登場する。

『三人のための歌』にはフィリポスとガールフレンドのクリスティナ(弟アレクシスがからかっていた女の子)も主人公として出てくる。さらに数年後、二人は『丘の野獣たち』(*Τα τέρατα του λόφου*, 2002)で結婚するという具合である。

このように、異なる作品の間を共通する人物たちが自由に泳ぎ回りながら成長していくことで、ペトロヴィッツ作品群は一大サーガを構成することになる。

その集大成と思われるのが、これまでのところ最も新しい作品『赤ワインの予言』(*Η προφητεία του κόκκινου κρασιού*, 2008)である。

この作品では、主演の高校生オルガが歴史好きの父に連れられて、中世近代の建築物の遺るメレニコ村(現ブルガリア、20世紀初頭までギリシャ領)へ旅するが、その際祖母から一族の宝であった《三つ首のイコン》の行方を探るよう頼まれる。オルガの一家はかつてメレニコに居住していたようだ。観光客がたむけた村でイコンの情報を集めるうちに、オルガはオスマン朝期や独立戦争時代の一族の、さらにはギリシャ民族の歴史の森に分け行って行く。

この作品中での作家の仕掛けは壮大である。

オルガの父というのは、他ならぬノイガー先生であり、オルガの祖母は、『兄弟たちよ』の主演パヴロスの娘エリサヴェトなのである。かくして、これらの作品もまた密にリンクしている。

さらなる仕掛けとして、作品中では架空の人物と実在の人物が同居している。

現在のオルガの物語と交互に、19世紀のメレニコ在住の彼女の祖先の物語が語られるが、これらはいずれも(リンクしたパヴロス兄弟も含めて)架空の人物たちである。ところが、このメレニコの一族の祖となった女性は、ある裕福

な家門フリストマノス家の家政婦をしていたという設定になっている。フリストマノス家の独立戦争での活躍にも作品の多くのページが割かれるが、実は実在の一家である。ウィーン留学中にオーストリア皇妃エリーザベト（シシィ）との交友を描いた日記で知られるギリシャ演劇の祖コンスタンディノス・フリストマノス（Κωνσταντίνος Χρηστομάνος, 1867- 1911）もこの家系に属し、作品に（肖像写真という形で）特別出演して、メレニコのある女性に思いを寄せられている。

さらには、その一家を辿っていくと、なんと作家ロティ・ペトロヴィッツにつながるのである。

ということで、『赤ワインの予言』は、独立戦争期から現代までの二百年以上の歴史を辿りながら、作家の他作品の人物たちが次々に現れ、かつ、架空の人物群と（作家自身の家系である）実在の人物群が絡み合っただけでストーリーを紡ぎあげるといふ、まさに集大成の《人間喜劇》になっている。

#### 4. 和訳をめぐる《気づき》二点

二作品を和訳されたのは、数多くの翻訳書出版の経験のある岡本浜江氏である。1986年東京で開催された「子供の大世界大会」でペトロヴィッツ氏の通訳をされたことが翻訳のきっかけになった、と『弟たちよ』の「あとがき」に書いておられる。

ところで、『弟たちよ』に関して、筆者は二つほど些細な点に気づいたので記しておきたい。

まずは作品のタイトルなのだが、翻訳の底本になった英語版は *The Little Brother* であり、パタキス社から発行されている原典も *Ο μικρός αδελφός* である。いずれも単数形だが、和訳の「たち」と「よ」はどこから来たのだろうか。筆者の推測だが、岡本氏は作品の内容からあえて補ったのではないだろうか（日本語の座りのよさもあるかもしれない）。

ストーリーでは、弟はアレクサンドロス一人だが、兄パヴロスは戦火の町を逃げ、強制収容所へ連行される中で多くの年下の少年たちと出会う。上に書いたように、どの子も自分の弟なのだ、という心の声が何度も繰り返される。

「たち」が純粋な複数形であれ、「弟」及びその他の者たちという代表形であれ、アレクサンドロスだけではない複数の子供たちへの心底からの呼びかけが和訳題名に込められているように思われてならない。なお、パヴロスが結末で

抱きかかえて助けたブルガリア人の子供は、『赤ワインの予言』にたくましく成長した姿を見せている。

もう一つは、主人公の名前についてである。

『弟たちよ』の兄弟はパヴロスとアレクサンドロスであるが、原書 *Ο μικρός αδελφός* を見ると、兄の名はなんとアγγελロス (Άγγελος) となっている。岡本氏は「あとがき」でわざわざ「パヴロス」の語源に触れておられるので、元にされた英訳ですでに **Pablos (Pavlos?)** になっていたのではないかと思われる。

(英訳は書籍としては一般に出回っていない由。)

作品鑑賞に本質的な問題ではないのだが、どうにも気になってしまい、ペトロヴィッツ女史ご本人にメールで質問してみたところ、すぐにご親切な回答をいただいた。執筆はずいぶん前のこと(初版は1976年発表)でよくは覚えていないが、そういう変更は特に聞いてはいないとのこと。ギリシャ人名を混同しないようにとの(ギリシャ側の)出版社の配慮でしょうかね、と推測されていた。

確かに兄弟二人にはもう一人、姉のアルギリ (Άργυρή) がいて、「ア三姉弟」になって紛らわしいので、英訳を制作したギリシャの出版社が変更したのだろうか? これ以上は不明だが、『赤ワインの予言』の中で、命を救われた件のブルガリア人青年が何度も彼は自分の「守護天使」<sup>アγγελロス</sup> だった、とつぶやくシーンがあるので、「アγγελロス」の方がふさわしいかなとも感じた。

---

<sup>1</sup> ペトロヴィッツの作品リスト(表紙写真付き)は以下で見られる。

<https://biblionet.gr/%CF%80%CF%81%CE%BF%CF%83%CF%89%CF%80%CE%BF/?personid=3151>

<sup>2</sup> 1970年から80年にかけて離婚件数は3,491件から6,684件に急増している。1990年は6,037件に下がるが、その後は徐々に右肩上がりです。2017年に19,190件となっている。

Infographic ΕΛΣΤΑΤ (12 Απριλίου 2019).

<sup>3</sup> Konstantina Davaki, *The Policy on Gender Equality in Greece*, A Note for Directorate General for Internal Policies, Policy Department C: Citizens' Rights and Constitutional Affairs, Gender Equality, European Parliament, Brussels. 2013, p. 6.

[https://www.europarl.europa.eu/RegData/etudes/note/join/2013/493028/IPOL-FEMM\\_NT%282013%29493028\\_EN.pdf](https://www.europarl.europa.eu/RegData/etudes/note/join/2013/493028/IPOL-FEMM_NT%282013%29493028_EN.pdf)

<sup>4</sup> 事故に遭った重傷のアレスをどう救うかという、家族最大の試練の場面は、小学校3-4年の国語の教科書に抜粋されている。